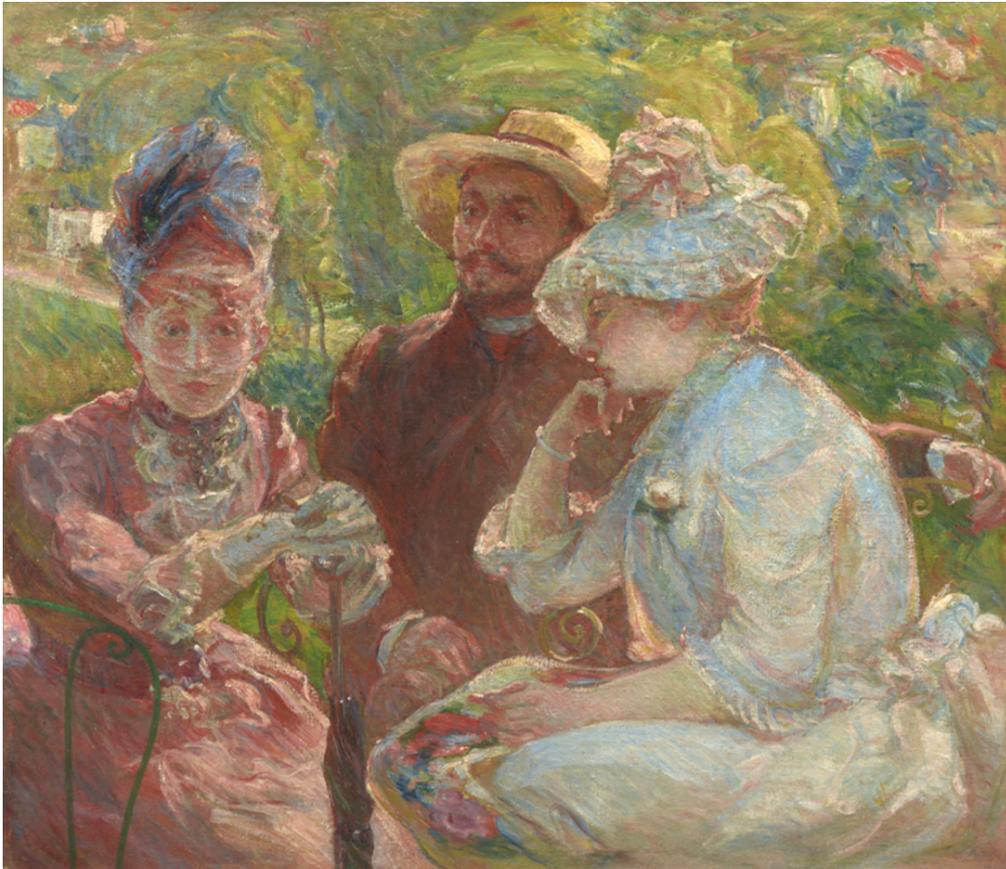


3人の人物が、なにやら集まっています。 〈6F〉



マリー・ブラックモン 《セブルのテラスにて》1880年、油彩・カンヴァス

Q1. 3人はそれぞれ何を見ているのだろうか？

Q2. 3人はどんな関係かな？

家族？ 友だち？ それとも 今日初めて会った人たち？

Q3. 絵のなかの時間はいつごろだろうか？

どうしてそう思った？

朝  お昼  おやつ時間  夕方  夜

Q4. それでは最後の質問。この3人は何をしているのだろうか？ どんな気持ちでいるのかな？

Q1～Q3で考えたことをヒントにしてね。

## 《セーブルのテラスにて》

《セーブルのテラスにて》には3人の人物が描かれています。右の女性は画家自身だろうと考えられていますが妹がモデルだという説もあります。中央の男性は、作者の友人で画家のアンリ・ファンタン＝ラトゥール（1836-1904）、左の女性は彼の妻で画家のヴィクトリア・デュブール（1840-1926）だとされています。右の絵画は、中央の男性ファンタン＝ラトゥールが1865年に描いた作品です。マリー・ブラックモンの絵画と比べると、はっきりとした線でリアルに描かれています。ファンタン＝ラトゥールは印象派の画家と親しかったものの、見たものをそのまま写すという昔からの表現を重視し、色彩やものの配置の調和がとれた絵画を多く残しました。

(参考) アンリ・ファンタン＝ラトゥール《静物 (花、果実、ワイングラスとティーカップ)》1865年、油彩・カンヴァス



## いんしょうは 印象派ってどんな絵？

作者の女性画家マリー・ブラックモン（1840-1916）が描く絵には、印象派の表現が見られます。印象派とは、光や空気感を含めて画家が抱いた印象を感じたままに描く、1860年代にフランスで誕生した芸術様式です。絵の題材には風景や庶民の日常生活が選ばれ、制作は主に屋外で行われました。印象派以前の絵画では画面に筆で描いた跡が残らないのが良いとされていたため、絵の具を混ぜず線も不明瞭な印象派を、保守的な人々はただのスケッチだと批判しました。しかし印象派は、屋外でのスピード感のある生き生きとしたスケッチを追求し、展覧会を何度も開催するなかで、人々に愛されるようになりました。マリー・ブラックモンの絵画は、風景を見て感じたままに描く印象派らしさがありながらも、色彩やものの配置にまとまりがあるのが特徴です。



## マリー・ブラックモンと夫フェリックス・ブラックモン

マリー・ブラックモンの夫は、石版画家・銅版画家であるフェリックス・ブラックモン（1833-1914）という人物です。二人はともにお皿など陶器のデザインも手がけました。左の作品はフェリックス・ブラックモンが1890年に制作した銅版画（エッチング）です。彼には印象派の友人がたくさんいたため、彼女は夫を通して画家たちと交流できました。しかし、フェリックス・ブラックモンは妻の制作活動に反対していたため、彼女の作品の多くは人前に出なかったと言います。当時は、優れた女性画家でも男性作家と同じように活躍するのが難しい時代でした。

(参考) フェリックス・ブラックモン《家鴨》1890年、エッチング

ご自宅から大きな画像を見たい方は、作品検索より作者名（例えば「ブラックモン」「ラトゥール」）で検索！

